

収縮期高血圧は大動脈弁疾患の 修正可能なリスク

収縮期血圧（SBP）が大動脈弁狭窄（AS）および大動脈弁逆流（AR）の修正可能なリスク因子であることが、英国の大規模コホート研究により示唆され、Eur Heart J 誌に掲載されました。



SBP が 20mmHg 上昇することにより AS リスクは 1.4 倍（ハザード比 [HR] :1.41）に、AR リスクは 1.38 倍（HR:1.38）に、それぞれ増大していました。



SBP \leq 120mmHg の患者と比較すると、SBP \geq 161mmHg の患者が AS と診断される割合は 2 倍超（HR:2.27）、AR と診断される割合は約 2 倍（HR:1.96）でありました。